天地に宿る六つの想い

kaiser

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天地に宿る六つの想い

【Ｎコード】
Ｎ１４４４Ｐ

【作者名】
ｋａｉｓｅｒ

【あらすじ】
いつもと何も変わらない寒い冬の帰り道。
そこに、カードの聖霊が！？
遊戯王５Ｄ，ｓトリップファンタジーアドベンチャー

第一話　舞い降りた流星（前書き）

この作品は基本的にはオリジナルキャラで進んでいきます。
また、一部原作キャラの扱いが酷かったり、大きく原作から逸れたりいたします。
そう言ったものに嫌悪感を抱かれる方、また、基本的に原作キャラの扱いが酷いのが許せないかたは、
戻ることを推奨いたします。

また、作者はそんなに文才がないので、「こんなもん読んでられるか！！」というかたもあまりお勧めはしません。

でも、読んでいただけると幸いです。

では、これからよろしくお願いしますね。。

第一話　舞い降りた流星

―何も変わらない、いつもの寒い冬の帰り道。
友達と騒いで、歩いて、そして最後には私と双子の姉だけになる。

私の名前は、「水無月　澪（レイ）」。今、高校2年生。傍で笑っているのが、姉の「水無月　凛」。

そんな二人で話しながら帰る、変わりない日常のはずだった。

―アレが現れるまでは―

それらはいきなり私たちの前に降りてきて、こういった。

「見つけた。主らこそ、我らが宿主（テイマー）だ。」と。

はっきり言って、何がなんだか分からなかった。

今、私たちの目の前にいるのはどう見ても、「シューティング・スター・ドラゴン」であり、「ジュラック・メテオ」なのだ。

まぁ、話しているのはシューティングのほうなんだけれども。

「ねぇ、これって俗に言うカードの聖霊って奴？」

小声で姉が私に聞いた。

「その通りだ。」

聞こえていたらしく、私の代わりに「シューティング・スター・ドラゴン」が答えた。

「我らには、主らの力が必要なのだ。どうか力を貸して欲しい。」

「・・・って言われても、とりあえず話を聞かないとね・・・」

私がそう答えると、彼は語りだした。

「今、我らが聖霊界と、ネオ童実野シティに危険が迫りつつある。我らは六属性の長としてこの世界にいる優秀なデュエリストに協力を頼みたいのだ。」

確認のため、私は聞いた。

「う～ん。それは今他の四人の所にも貴方たちみたいな六属性を司る他の長が行っているってこと？」

彼はすぐに答える。

「ああ。我らはたまたま宿主(ティマー)が姉妹だっただけだ。」

「・・・だってさ、どうする？お姉ちゃん。」

「あたしは・・・・・いいよ。見捨てて置けないし。」

・・・そういうとは思ってたけどね。お姉ちゃん何かと人助け好きだし。

だから、生徒会長とかやる羽目になるんだよ・・・

まぁ、お姉ちゃんが行くなら私も行かなきゃね。心配だし。

「主はどうする？」

「・・・・私も、行くよ。お姉ちゃんを一人にするわけにもいかないし。」

「・・・・感謝する。我らが主よ。」

そんなこんなで、私たちは他の４人と合流するために一度、聖霊界の長の集まる場所へと案内された。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーー

ー聖霊界　六属性長の館ー

とりあえず、今私たちどうやってここ来たの？

「我が次元を結んだ。心配は無い。」

・・心を読むな！！でもありがとう！！

「礼には及ばん。」

いや、それはいいけどさ・・・

「お姉ちゃんはどこにいるの？」

私の疑問に彼はすぐに答えてくれた。

「この館の中にいる。問題は無い。それより・・・」

「ん？」

「我は主を盟主（ティマー）としたが、まだ正式な契約を交わしていないからな。」

・・・契約？なにすんのさ。

「心配には及ばん。証である宝玉（ぎょく）を刻んでもらうだけだ。」

・・・刻む？体にですか・・？

「大丈夫だ、他の盟主（ティマー）以外には見えぬ。それに痛みを感じるわけでもないし、肌を傷つけるものでもない。」

・・・・ほっ。それならいいや。

「・・・・・ってことは、お姉ちゃんもコレを？」

「そういうことになる。」

「ちなみに、どこにつけるの？」

「それはすでに決まっている。主は風の盟主（ティマー）であるから、右の首筋。主の姉は炎で、額。」

・・・首筋、か。それにしてもお姉ちゃん、額って・・・

「その他は、光が左の頬、闇が右の掌、水が左腕、地が左の手の甲だ。」

ふーん。聞くと額が一番嫌だよね。どんまい♪お姉ちゃん！

「んで、気になったんだけど、私のデッキどこに行ったの？」

その答えをくれたのは、「シューティング・スター・ドラゴン」では無い、別の声だった。

「こちらにあります。マスター。」

聞きなれない声に振り向くと、そこにいたのは「ガスタの静寂　カーム」。私が愛用しているカードの聖霊だった。

「カーム？」

そう問いかけると、彼女は素直に答えてくれた。

「はい。マスター。」

そうして、彼女から受け取ったデッキを確認して、私はお姉ちゃんのいる「炎の部屋」へ向かった・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

ー炎の部屋ー

コン！コン！

「お姉ちゃん？私だけど、入るよー？」

えっ！？ちょっと待って、すぐに出るからっ！！

（なんか、いきなりドタバタ？）

「言葉があまり通じないからだろう。仕方が無い。」

そう言う、「シューティング・スター・ドラゴン」は、先ほどよりも幾分かサイズが小さくなり、今はカームの肩に乗っている。

普通に言えば、非常に可愛い。っていうか、ぬいぐるみみたいにして欲しい。

「止めてくれ。」

「・・・いちいち心を読まなくていいよ。」

「読んでいるのではない、感じ取ってしまうのだ、それが契約というもの。」

・・・なんかずるい。

「まぁ、マスター。私には分かりませんから・・・」

・・・ありがとう。カーム。貴女が空気の読める子で助かる。
そうこうしている間に、お姉ちゃんの準備が終わったらしく、扉が開く音がした。

ギィィィィィ・・・・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

顔をあわせたときに二人の間に訪れた沈黙。
その静寂を私が破った。

「お姉ちゃん、何で髪の毛紅いの？」

「そっくりそのまま聞くわ、澪も髪の毛碧色よ？」

「「・・・・・・・・・」」

「とりあえず、シューティング、説明お願い。」

「我か？」

「そう。説明プリーズ。」

「・・・・歴代の六属性の盟主（テイマー）は、司る属性により、髪の毛と瞳の色が変わるのだ。もちろん、盟主（テイマー）の任を終えれば、元の色に戻る。」

「・・・・そう。とりあえず、戻るならいいわ。」

「それよりも、今思ったんだけど、「シューティング・スター・ドラゴン」って、名前長くない？」

「確かにそうだけど・・・「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン」だってたいした変わりはないわよ？」

「それでも長い！！何か名前付ける！！」

う～んと・・・・ ｓｈｏｏｔｉｎｇ ｓｔａｒ でしょ、「流れ星」だから・・・・

「「トレイル」で、どう？」

「主が決めたなら我は依存は無い。次からはそのように呼んでくれ。」

「ちなみに、理由を聞きたいんだけど・・・」

「理由は、シューティング・スターって流れ星でしょ？そっから、流星群に派生してって・・・」

「それで？」

「う～ん、お姉ちゃんが知ってるかどうか知らないけど、流星群をもたらす流星物質を放出した天体をその流星群の母天体って言って、

母天体の周囲には、放出された一群の流星物質が細い帯状に伸びてるんだよ。これをダストトレイルと呼ぶの。んで、そっからとって、トレイル。」

「ちなみにその情報は？」

「もちろん！優秀なｗｉ○ｉｐｅ○ｉ○だよ！！」

（やっぱり・・・・・）

だって、自力じゃ無理だもん♪

・・・・そうだ、カームにもつけてあげよう。

「トレイルだけじゃ不公平だから、カームにも名前をつけてあげるよ！」

遠慮がちにカームは言った。

「い、いえ、別に私は付けていただかなくても、呼びにくいとは思いませんし・・・・／／／」

カーム、照れてるね、可愛い♪

「う～んとね・・・・」

よし！決めた！！

「カームは、「恭華」。」

「・・・・・なんか、和名ね。」

「・・・マスター。ありがとうございます・・・」

「いいんだよ♪恭華は私の一番のお気に入りカードだし♪」

「ちなみに、理由は？」

「ん～？だって、ガスタの『静寂』でしょ？だから、恭しさのある、それでいて可憐な華って意味で。」

「・・・・普通にいい名前だね・・・」

「でしょ♪私も結構しっくりきてるんだよね～」

「・・・・・・・・・・」

あれ？何かトレイルが話してる？誰とだろう？

「トレイル？誰と話してるの？」

「・・・・・ん？ああ、他の長と交信していた。大体揃ったそうだ。我々は一足先に大広間へ向かうとしよう。」

・・・・大広間、か。部屋ですらこんなに大きいのに、大広間とかどんだけ広いんだろう・・・？

「・・・それより、誰が来たの？」

「今のところ、光と水の盟主（ティマー）のようだ。」

「光と、水・・・・か。」

「水は予想つくわね。」

・・・・まぁ、普通にくれば、儀式メインのリチュアか、シンクロなら氷結界か、もしくはリチュアメインのサポートに氷結界か。

「たぶん、氷結界だと思うけど・・・・」

そうすると、長はトリシューラ？鬼畜だね～。

「光はどうだと思う？お姉ちゃん。」

「シンクロがメインみたいだから、ヴァイロンか、魔轟神か・・・」

「強さでいったら、魔轟神だよね・・・」

「そうね。」

「魔轟神は１ショットが辛すぎるんだよ～」

しかも、こっちじゃライフ４０００だし。

「それを言うなら、澪がたまにまわしてるカーム１ｋｉｌｌのほうが鬼畜だわ。」

まぁ、手札８枚にすれば終わるし。

「でも、リアルだったら、メンタルマスター禁止になりそうじゃん。」

「そうなったらサイキック族初の禁止ね。」

「まぁ、どっちにしろ魔轟神でも何でも、味方でしょ？」

「ええ、それもそうね。」

・・・ところでやっぱ魔轟神ならレヴュアタンかな？椅子座りながら浮いて移動すんのかな・・・？

凄く気になる・・・・。

早く、会いたいなぁ、レヴュアタン。

第一話　舞い降りた流星（後書き）

え～、とりあえず主人公とメインキャラの登場までですね。まだ2人ですけど・・・
次回から他の宿主（ティマー）なんかも登場いたします。

最後のほうにデッキ予想みたいなのがありますが、お楽しみに、ということで・・・

では、次回も読んでいただければと思います。

第二話　光の宿主（テイマー）、あの御方現る（前書き）

今回はデュエル有です。

初なので、何かと見苦しいとこもあるかと思いますが、軽く眼をつぶってみてください。

第二話　光の宿主（テイマー）、あの御方現る

ーきっとそれは、微かな願いー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー六属性長の館　大広間ー

「うわっ、ひっろ〜〜〜」

見渡す限り、一面が部屋。

ああ、どうも、主人公の澪でございます。

今回は、何やら仲間が増えるやらで、若干期待に胸膨らましてます。
主にレヴュアタンに。

にしても広い。もう、ここはダンスフロアかってくらい。

「そのように使われることもあるな。」

今、聞いても無いのに心を読んで勝手に答えてくれたのが私の相棒「トレイル」。本当は「シューティング・スター・ドラゴン」だけど。

名前が長いから、私が名づけました。まぁ、一話を見てもらえれば分かりますけどね。

そんなことより、どうやら他の宿主(テイマー)が到着したみたい。

「初めまして。僕が光属性の宿主(テイマー)、雪城　光です。使用デッキは・・・」

「レヴュアタン！！」

「・・・・私が、・・・どうかしたか？」

流石に精霊といえど、驚いたようだ。少し戸惑っている。

「・・はい。ご覧の通り、魔轟神です。」

嬉々として、私は彼に近寄った。

「いや、会いたいとは思ってたけど、まさか本当に連れてきてくれるなんて！！私、君とは仲良くなれそうだよ！！」

「・・・そ、それはどうも・・・」

「ほら、澪、光君若干引いてるわよ。」

「えっ？あ、ごめんごめん。自己紹介すらしてなかったね。私は澪。水無月　澪。　見れば分かると思うけど、メインはガスタで、切り札はシューティングだから。」

「あたしは、この娘の双子の姉で、水無月　凛よ。　あたしは基本的にジュラックね。そんなに強くは無いけれど・・・」

「はい。澪さんに、凛さんですね。これから宜しくお願いします。」

「あ、「さん」とか付けなくていいよ。私そうゆうのあんまり好きじゃないから。」

「そう、ですか？じゃあ、澪って呼ばせてもらいますね。それから、僕のことも光でお願いします。」

「ならあたしも同じようにおねがいしようかしら？」

「はい。わかりました。」

・・・こうやって集まっても全員揃わないと、すること無いね～

しょーじき、暇なんですけど。

「手合わせでもすればよい。」

・・さっき魔轟神と戦いたくないって言ったばっかなのに？

「それは主の問題であろう。」

そうだけどさ・・・

「僕はかまいませんよ。」

「向こうは乗り気だぞ？」

やりますよ、やればいいんでしょ！？

「じゃあ、お願いします。」

「ライフ、どうします？」

「・・・是非、８０００で。１ショット怖すぎるから。」

「まぁ、８０００あっても削れますけど。」

はぁ・・・・これだから魔轟神は怖いんだよ・・・・

「じゃあ。」

「「決闘（デュエル）！！」」

「先攻どうぞ。」

・・・しょーじきありがたい。

まぁ、悪くない手札だし。警戒だけして早めに立てちゃおうかな。

「じゃあ、私は手札から、「おろかな埋葬」を発動。デッキから、「ドラグニティーファランクス」を墓地へ送るよ。」

「さらに、モンスターをセット。カードを2枚セットして、ターンエンド。」

「では、僕のターン。」

・・・ここでどうくるかな?やっぱりライロで墓地肥やしから?

「モンスターをセット。ターンエンド。」

セット、ね。ライコウか、魔導雑貨かな・・・

「私のターン。ドロー。」

ガスタ・イグル・・・とりあえずセットかな?

「モンスターをセット。ターンエンド。」

殴られる可能性はまだ低いけど、耐性はつけとかなきゃね。

「僕のターン。」

「僕は、魔導雑貨商人を反転召喚！」

きた。究極の墓地肥やし。

「めくりますよ。」

どれだけ、落ちるかな・・・？

「えーと、「ライトロード・マジシャン　ライラ」、「レベル・スティーラー」、「ライトロード・ハンター　ライコウ」、「魔道雑貨商人」、「オネスト」、「魔轟神クシャノ」、「魔轟神ソルキウス」、「魔轟神クルス」、「カードガンナー」、「ＡＤチェンジャー」、

「ライトロード・マジシャン　ライラ」、「魔轟神クシャノ」、「魔轟神レイヴン」・・・「おろかな埋葬」っと、ここでとまりますね。」

・・・十分すぎる。しかも最後がおろ埋？「クシャノ」×２と「レベル・スティーラー」、「ソルキウス」まで落ちてるのに？

「じゃあ、僕は「おろかな埋葬」を発動。デッキから、「ネクロ・ガードナー」を墓地へ送ります。」

やばいな～、これ。

「では、僕は手札の「魔轟神クシャノ」と、「冥府の使者　ゴーズ」を捨て、「魔轟神ソルキウス」を特殊召喚。」

「そうはさせないよ。罠カード発動！「風霊術ー「雅」」！私はセットしていた「ガスタ・ガルド」をリリースして、「魔轟神ソルキ

ウス」をデッキの下へ戻す！！」

「タイミング逃しちゃうから「ガスタ・ガルド」の効果は発動しないけど・・・」

でも、ソルキウスは墓地にいない。手札も2枚削ったし、十分♪

「これ以上下手に展開はできませんね。モンスターをセット。ターンエンドです。」

「私のターン。ドロー！」

ワン・フォー・ワン。いい引きね。

「私は、手札から、「ワン・フォー・ワン」を発動。手札の「グローアップ・バルブ」を捨てて、デッキから、「ドラグニティートリブル」を特殊召喚！」

さぁ、始動と行きましょう♪

「「ガスタ・イグル」を反転召喚！レベル1、「ドラグニティートリブル」に、レベル1、「ガスタ・イグル」をチューニング！」

（フォーミュラ・シンクロン・・・厄介なものが・・・・）

「その思いを速さに変えて、星を地平へと誘え！シンクロ召喚！！希望の光、シンクロチューナー、「フォーミュラ・シンクロン」！！」

う～ん。台詞っていいね・・・・

「「フォーミュラ・シンクロン」の効果発動。カードを一枚ドロー。」

「更に私は、「ドラグニティードゥクス」を通常召喚。そのまま効果発動！墓地の「ドラグニティーファランクス」を装備。更に「ドラグニティーファランクス」の効果発動！ファランクスの装備を解除！」

さ、一気にシューティングまで持ってく！！

「レベル4、「ドラグニティードゥクス」にレベル2、「ドラグニティーファランクス」をチューニング！」

「鳥と竜、今ここに交わりて新たな騎士を呼び覚ます！吹きすさべ、風よ！シンクロ召喚。紅き竜騎士、「ドラグニティナイトーヴァジュランダ」！！」

「「ドラグニティナイトーヴァジュランダ」の効果発動！墓地の「ドラグニティーファランクス」を装備。更に「ドラグニティーファランクス」の効果発動！ファランクスの装備を解除！」

まだまだいくよ！！

「レベル6、「ドラグニティナイトーヴァジュランダ」に、レベル2、「ドラグニティーファランクス」をチューニング！」

「吹き荒れる風が、ここに新たな星を生み出す！光差す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよ、「スターダスト・ドラゴン」！！」

（これは、キツイ・・・こんなに早くシューティング・スターが・・・・）

「コレで最後！レベル8、「スターダスト・ドラゴン」に、レベル2、「フォーミュラ・シンクロン」をチューニング！！」

「全てを包む悠久の風、その頂点に立つ者よ、今その姿に流星を纏いて、私の前に舞い降りろ！！シンクロ召喚！生来せよ、「シューティング・スター・ドラゴン」！！」

「早くも、我の出番か・・・」

「うん♪宜しくね。トレイル♪」

「流石は同じ宿主（ティマー）、こんなに早く「シューティング・スター・ドラゴン」が出てくるとは思わなかったよ。」

「でも、まだやることがあるからね。私は、セットしてあった、「ガスタの交信」を発動！墓地の「ガスタ・ガルド」と、「ガスタ・イグル」をデッキに戻し、光のセットモンスターを破壊！」

「・・・・・っく！墓地肥やし＆盾が・・・・・」

ライコウ・・・ラッキーだね♪

「ここで、「貪欲な壺」発動。「スターダスト・ドラゴン」、「フォーミュラ・シンクロン」、「ドラグニティードゥクス」、「ドラグニティナイトーヴァジュランダ」、「ドラグニティートリブル」

をデッキへ戻し、２枚ドロー！」

カームにスタロか・・・チューナー引かなくて良かった・・・・

「じゃあ、「シューティング・スター・ドラゴン」の効果発動！カードを５枚めくるよー。」

ペラッ・・・

「一枚目、「ドラグニティーファランクス」！二枚目、「激流葬」！三枚目、「スターライト・ロード」！四枚目、「ガスタ・イグル」！そして五枚目、「ガスタ・ガルド」！」

「計３回の攻撃が可能！このままバトルフェイズ！トレイルで、光に３回アタック！！行け、「スターダスト・ミラージュ」！！」

「・・・・・っ！１回目を「ネクロ・ガードナー」で無効！」

「でも、「魔道雑貨商人」への攻撃と、１回ダイレクトが通る！」

「・・・・・くっ！！」

光　ＬＰ８０００　→　１６００

「私はこれで、ターンエンド。」

「っ、ドロー。」

「行きます。「魔轟神クシャノ」の効果発動！「魔轟神ソルキウス」を捨て、「魔轟神クシャノ」を手札へ！そしてそのまま「魔轟神ソルキウス」の効果発動！「魔轟神クシャノ」と、「ＡＤチェンジャー」を捨て、「魔轟神ソルキウス」を特殊召喚！！」

魔轟神起動か・・・

ホント最悪。

「墓地の「レベル・スティーラー」の効果発動！「魔轟神ソルキウス」のレベルを一つ下げ、特殊召喚！」

ソルキウス　星６　→　星５

「そして、「魔轟神クシャノ」の効果発動！「魔轟神レイヴン」を捨て、「魔轟神クシャノ」を手札へ！そしてそのまま召喚！」

「レベル１、「レベル・スティーラー」と、レベル５になった「魔轟神ソルキウス」にレベル３、「魔轟神クシャノ」をチューニング！」

「深海さえも凍てつかせる氷の王よ、その力を示せ！シンクロ召喚、出でよ！「氷結界の龍　トリシューラ」！！」

うわっ、きっつ～～

「「氷結界の龍　トリシューラ」の効果発動！澪の墓地から、「ドラグニティーファランクス」を、フィールドから「シューティング・スター・ドラゴン」を、そして、手札を一枚除外！」

持っていかれたのは「スターライト・ロード」。良かった～、カームじゃなくて。

「「氷結界の龍　トリシューラ」で、澪にダイレクトアタック！「三神槍の息吹（アブソリュート・ブレス）」！！」

「きゃあぁぁ！！」

澪　ＬＰ８０００　→　５３００

「僕は、「氷結界の龍　トリシューラ」のレベルを一つ下げ、「レベル・スティーラー」を守備表示で特殊召喚してターンエンド。」

「私のターン、ドロー！」

死者蘇生・・・！！！

いい引きしてる♪

「いくよ！墓地の「グローアップ・バルブ」の効果発動！デッキの一番上を墓地へ送り、特殊召喚！」

ぺらっ・・・

落ちたのは、「ガスタ・イグル」！

（このターンで決める！！）

「私は、手札の「ガスタの静寂　カーム」を捨てて、手札から、「ＴＨＥ　トリッキー」を特殊召喚！」

「そして、「死者蘇生」を発動！」

「私は、墓地から、「ガスタの静寂　カーム」を特殊召喚！ごめんね恭華、素材にさせてもらうね。」

「いえ、マスター。使っていただけるだけで光栄です。」

「ありがとう、恭華。いくよ！レベル４、「ガスタの静寂　カーム」に、レベル１、「グローアップ・バルブ」をチューニング！」

「谷へ舞い降りた風が、嵐となりて訪れる！シンクロ召喚、舞い踊れ！「ダイガスタ・ガルドス」！！」

（さぁ、いくよ！！）

「「ダイガスタ・ガルドス」の効果発動！１ターンに一度、墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター２体を戻すことで、相手フィールドに表側で存在するモンスター１体を破壊する！対象はもちろん、「氷結界の龍　トリシューラ」！！」

「っ！まさか！！」

「バトルフェイズ！「ＴＨＥ　トリッキー」で、光の「レベル・スティーラー」に攻撃！「トリック・ボール」！」

「・・・・っく！」

「これで、終わりだよ。「ダイガスタ・ガルドス」で、光にダイレクトアタック！「ストーム・ブラスト」！」

「う・・わぁぁぁぁ・・・・・!!」

光　LP1600　↓　0

第二話　光の宿主（テイマー）、あの御方現る（後書き）

はい。第二話でした。

次にはきっと全員集合する・・・かな？

まぁ、気長にいきましょう。頑張って書きますので・・・

では、次回も宜しくお願いいたします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1444p/

天地に宿る六つの想い

2010年12月10日17時29分発行